

Handelt es sich bei freiem Dativ um eine Ergänzung oder um eine Angabe?

馬場崎, 聡美
九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1669324>

出版情報 : 九州ドイツ文学. 29, pp.47-59, 2015-10-30. VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン :
権利関係 :



依存関係文法における任意の3格

馬場崎 聡 美

1. はじめに

3格目的語は、統語的機能という点で、義務的な共演成分と、任意的な共演成分に分類することができる。ここでは、一般的に「任意の3格」freier Dativと呼ばれている範疇に収まっている3格の文肢を扱う。その際、問題となるのは、任意の3格は本当に添加語なのか、ということである。もしかすると、付加語または補足成分になり得るのではないかという疑問点である。

例えば、ドイツの大学で使われている教科書では、利害の3格を説明する場合、例文1)がでている。例文1)、2)で説明をとするならば、統語的結合価において添加語である3格目的語のmirは、意味的結合価において分析する場合、補足成分になり得るのであろうか。

- 1) Eine Münze fällt mir ins Wasser. コインが水に落ちてしまった。(話者の不利益)
- 2) Eine Münze fällt ins Wasser. コインが水に落ちた。

いわゆる任意の3格を用いた文は、結合価理論において、以前からやっかいな問題として取り上げられてきた。Welke¹⁾が例に挙げる「Er backte ihr eine Torte. 彼は彼女のためにトルテを焼いた。」において、ihrは補足成分と添加語の両方になり得る。本来、任意の3格は、話者によって自由に付け加えることができる。しかし、昔から3格という形態は、義務的補足成分である。

意味論上は、補足成分に関わる問題なので、3格目的語という名称を付ける根拠は十分にある。Gallmann²⁾の意見では、任意の3格の定義が定まらない場合、二つの可能性が考慮される。もし任意の3格が補足成分になる可能性があるならば、様々な動詞の結合範囲が拡張して、動詞の別形(新しい定義)が作られて辞書に追加されるということになる。しかし、任意の3格が動詞(または文全体)を修飾するのであれば、添加語となる。

この3格は比較的自由に付け加えることができる添加語である。それと同時に、純粋に脈絡や意味的結合価を考慮すれば、3格が補足成分に見える可能性も出てくるのである。意味的結合価とは、動詞と補足成分を組み合わせる際に、その文の意味が成り立つことを指す。ある動詞が開く空位には、特定の意味役割が与えられている補足成分が入る。そして、その補足成分に対して意味的な制約が定められている。例えば、動詞essenは「人間が食べる」という意味を有し、主語には人間しか入らない。またこれに似た動詞fressen

は、「動物が食べる」という意味を有するので、主語には動物が入るのである。³⁾

ここで最も重要なことは、全ての動詞に任意の3格を付け加えることは不可能であり、ある特定の動詞とだけ組み合わせることができるのである。以下、本論では、任意の3格を用いる際に、規定に関してどのように解釈を行うべきか、そして統語論と意味論のどちらの観点から考慮するのが最良の方法であるのかについて論じる。

2. 任意の3格：意味論上の支配

まず、最初に必ず明確にしておかなければならないことがある。3格は動詞の支配下にあるのか、それとも主語や目的語の支配下にあるのだろうか。一方で、動詞は行為を表すので、その行為と密接に関わりのある3格があり、他方で、行為・事柄によって直接影響を受ける者、すなわち主格や4格目的語に入る人物との関連性を示す3格がある。任意の3格は人物を表すので、特定の意味的役割を伴っており、意味論上は一つの補足成分という扱いになるのではないだろうか。それ故に、場合によっては、「3格目的語」という名称を与えることは正しいと見なされる。⁴⁾

ここで、添加語と補足成分の違いを確認しておこう。

補足成分：文を構成する成分としての句が、補足成分となる。補足成分は、あらかじめ動詞の意味に組み込まれているものと想定される。

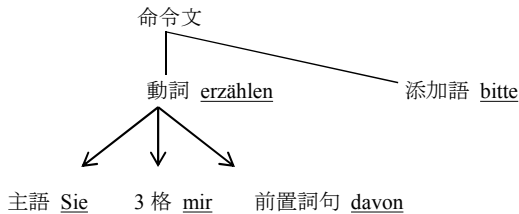
添加語：補足成分と同様に、文を構成する成分としての句である。一つの単語、句、場合によっては文全体を修飾する。あらかじめ動詞の意味に組み込まれていないものと想定される。区別をつける時の見解は、異なる場合がある。例えば、文の中に動詞以外の成分が四つある。「Anna stellte rasch eine Kerze auf den Tisch. アンナは素早く一本のろうそくを机の上に置いた。」四つの成分が動詞 *stellen* の意味に依存しているという判断を下すとすれば、四つとも補足成分と見なす（動詞の結合価は4価）。もし、*rasch* は動詞を修飾する副詞で、動詞の枠外に位置するという判断を下すならば、補足成分は三つとなる（動詞の結合価は3価）。⁵⁾

基本的に、義務的な3格は間接目的語という特徴づけがある。動詞の支配を考慮するとすれば、義務的な3格の欠落は文構成要素の部分的な省略であり、その結果出来上がった文ということになる。「Er finanziert seinem Kind das Studium. → Er finanziert das Studium. 彼は子供に大学の学資を出してやる。」つまり、動詞 *finanzieren* にはもともと3格があるのだが、それが削除され出ない場合があるという見方である。

Helbig/Schenkel⁶⁾の意見では、任意の3格の統語的機能は添加語と同じ位置に並べられ、任意の3格が目的語と称される可能性は二義的な問題である。しかし、意味論上の区別では、任意の3格が目的語という範疇から果たして離脱するのかどうかは未決定のままである。

3. 依存関係構造樹における3格の配置

まず、必須の成分である「3格目的語」について説明をする。動詞の結合価により支配され、義務的補足成分と見なされる。もちろん „für – “ や „gegen – “ などの前置詞句に置き換えることはできない。次の二つの例文では、それぞれの3格目的語は本動詞に依存している。「Ich danke dir sehr. 私はあなたに感謝します。」「Erzählen Sie mir bitte davon! それについて聞かせてください。」



また、次の例文ではある状況に限りて使用される3格が出ている。本来ならば3格支配ではない動詞に3格が現れている。

Ich habe mir eine Woche Zeit genommen, um mich von meinem alten Zuhause verabschieden.
 Ich bin mit dem Fahrrad den alten Schulweg durch die Felder abgefahren.
 私は自分の旧家から離れるために、一週間の休みを取った。私は自転車に乗って、野原を突き抜けている昔の通学路をくまなく巡回した。(Grabitz, Christoph: Hallo, wir kommen zu euch! Die Zeit. N° 24. Das evangelische Magazin 6. Juni 2013, S. 17.)

この nehmen は、権利として与えられているものを行使する、または休暇などを取るという意味で使われる。「seinen Urlaub nehmen 規定休暇を取る・(sich³) einen Tag frei nehmen 一日休みを取る」の場合、必ずしも nehmen は3格支配ではない。しかし、法令の個々の条約などで規定されておらず、ただ単に「時間をかける、ゆっくりやる」という言い回しでは、3格が必ず出て来る。任意的補足成分である3格と Zeit nehmen が結合し、全体がある意味を表すようになって固定した、一種の慣用句になったと考えられよう。3格目的語が再帰代名詞のような役割を果たして、再帰的な意味合いが定着した表現ではないかと考えた。

これとは反対に、任意の3格は動詞、主語、目的語を意味論上受ける格であると同時に、文全体に関係する用法もあり得る。任意の3格には五つのカテゴリーがあり、一口に「任意」とは言えず、複数の使い方が見られるのである。ここで任意の3格の用法について、簡単な種類分けが必要である。例えば、叙述の内容に何らかの利害関係のある人物が登場する場合、「利害の3格」Dativus des Interesses (利益の3格 Dativus commodi・不利益の3格 Dativus incommodi) の挿入が重要となる。その他の主な役割として、身体の一部を表す「所有の3格」Pertinenzdativ、「関心の3格」Dativus ethicus、「知覚の3格」Dativus judicantis、

「共感の3格」Dativus sympatheticusが存在する。意味論上の任意の3格の分析において、3格が文中のどの要素を受けるのかということ以外の点は、あまり重要ではない。

3格には様々な用途があり、動詞との結合能力の点から見ると、次の様に一つのヒエラルキーが出来上がる。⁷⁾ 動詞との結合がどれほど緊密であるのかということが問題となる。それと同時に、3格と同時に現れる他の格も見られる。

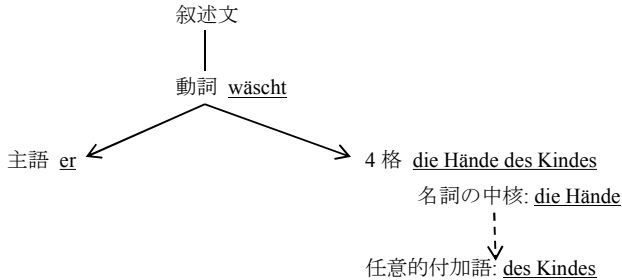
- 3) Er begegnet seinem Lehrer. (動詞が支配する唯一の補足成分)
彼は恩師に偶然に出会う。
- 4) Er gewöhnt seiner Freundin das Rauchen ab. (4格目的語の次に重要な補足成分・部分的に義務的補足成分となる)
彼はガールフレンドに喫煙の習慣をやめさせる。
- 5) Er bringt dem Kranken das Medikament. (部分的に任意的補足成分となる)
彼はその患者に薬を持ってくる。
- 6) Die Tochter pflückt dem Vater die Blume. (4格目的語と同時に登場する任意の3格)
娘は父のために花を摘む。
- 7) Die Mutter wäscht der Tochter die Haare. (ある名詞と同時に登場する任意の3格)
母は娘の髪を洗う。

4)の3格目的語 seiner Freundin は削除できない。もし削除すれば、社会全体に呼びかける禁煙運動のように聞こえるかもしれない。5)の3格目的語は、もちろん動詞に依存している。動詞 kaufen もこれと同じ種類である。「Ich kaufe mir ein Buch. 私は(自分のために)本を買う。」という文では、意味論上3格の mir がいわば再帰的な意味を有し、主語と関わりを持つ。そして、3格に主語と関係がない他人を入れることもできる。「Ich kaufe ihm ein Buch. 私は彼に本を買う。」6)は利害の3格である。3格 dem Vater は、話し手が随意に付け加えた要素であるが、これを für den Vater (父のために)と入れ替えることができる。7)は所有の3格なので、意味論上動詞というよりもむしろ4格目的語 die Haare に関係があると言えよう。もちろん3格に入る人物が身体、衣類の一部を所有しているという意味である。

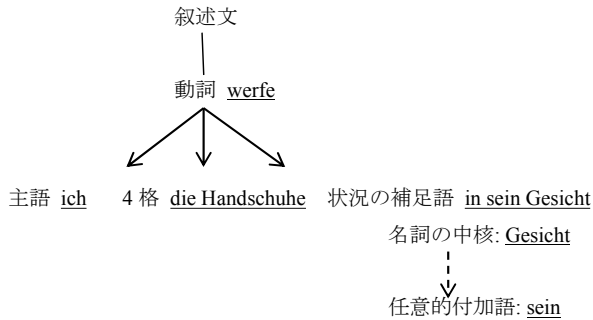
ここから先は、任意の3格について種類分けを行い、それに伴って分析を進める。

3.1. 「所有の3格」Pertinenzdativ

従来の所有の3格は、任意の補足成分をほのめかす要素ではない。なぜならば、所有の3格は2格目的語に書き換えることができるので、名詞の結合価に依存する要素となる可能性がある。「Er wäscht dem Kind die Hände → Er wäscht die Hände des Kindes. 彼はその子供の手を洗う。」人間の体や服の一部(名詞)に関係する故に、動詞に依存してはいないという見方が一般的である。



人によっては、所有の3格は文肢構成部の内に入ると見なす。⁸⁾ 要するに動詞の意味的結合価によって支配されないというわけである。また別の意見では、所有の3格は、所有代名詞に書き換えられるので、ここではどちらかと言えば、付加語の働きを持っているということになる。⁹⁾ 「Ich werfe ihm die Handschuhe ins Gesicht. → Ich werfe die Handschuhe in sein Gesicht. 私は手袋を彼の顔に投げた。」



この動詞は3価もしくは4価の動詞に見える。上の依存関係構造樹の中では、補足成分である「状況の補足語」Adverbialergänzungとして、文中に組み込まれている。

しかし、厳密には所有の3格の定義がもう一つ存在する。この別の定義では、意味論が大きな作用を及ぼし、所有の3格を一つの目的語として見なす。つまり、次のような命題への書き換えによって、所有の3格は命題を凝縮した要素だと見なすのである。特に重要なのは、この凝縮された命題の意味役割が、4格のdie Haareに密接に絡んでいるということである。¹⁰⁾

8) Sie wäscht ihrer Tochter die Hände.

彼女は娘の手を洗ってやります。

→ Sie wäscht die Hände. Die Hände sind (gehören) ihrer Tochter.

彼女は手を洗ってやります。その手は彼女の娘の手です。¹¹⁾

この場合は、文を構成する上で、独立している一つの要素となる。そして、常に体の部分や、衣類と共に登場する。「Der Kopf tut mir weh. 私は頭痛がする。」という文では、主語に身体の一部が置かれている。この場合は、「頭」と「私」の意味論上の関係が重要であり、意味的に3格の mir は主語 der Kopf に依存しているということになろう。「Der Kopf tut weh. Der Kopf gehört mir.」は、所有代名詞に変換することができるが、それは時おり起こることである。

実際に Gallmann によれば、所有の3格は、3格目的語の範疇に入る。¹²⁾ この場合、所有の3格は、身体の名称が主語と4格目的語と意味的に関わる。そして時おり、身体の名称は前置詞句として登場する場合も見られる。

9) Mir brennen die Augen.

私は目がひりひりする (所有の3格が主語を受ける)

10) Der Politiker schüttelte allen Anwesenden die Hand.

その政治家は全ての参加者と握手した。(所有の3格が4格目的語を受ける)

11) Der Trainer spritzte dem Radfahrer eine »Nährlösung« in den Oberschenkel.

そのトレーナーは、競輪選手のふとももに栄養液を注射した。(所有の3格が前置詞句を受ける)¹³⁾

Helbig / Buscha¹⁴⁾の説では、所有の3格は三種類存在する。実際の文の中では、所有の3格は目的語と同じ位置にあるものの、目的語と違って動詞に依存するのではなく、名詞的文肢(主語、目的語、副詞的規定)に依存するゆえ、これらの依存関係を基準に三種類に分けられるという考えである。ゆえ、

①所有の3格は、ある名詞(または名詞と一致する人称代名詞)が3格の形態となつて表される。

12) *Dem Kranken (ihm)* tat der Magen weh. その患者は胃が痛い。

13) Der Arzt operierte *dem Kranken (ihm)* den Magen. 医者はその患者の胃を手術した。

14) Er hat *seinem Freund (ihm)* in die Augen gesehen. 彼は友達の目を見つめた。

②所有の3格がある名詞で表されている場合は、2格目的語に変形させることができる。

15) Der Magen *des Kranken* tat weh.

16) Der Arzt operierte den Magen *des Kranken*.

17) Er hat in die Augen *seines Freundes* gesehen.

③所有の3格がもし、人称代名詞で表されているならば、所有代名詞に変形させることができる。

18) *Sein* Magen tut weh. 彼は胃が痛い。

- 19) Der Arzt operierte *seinen* Magen. 医者は彼の胃を手術した。
 20) Er hat in *seine* Augen gesehen. 彼は友達目を見つめた。

④所有の3格は常に随意に使用することができる。

- 21) Der Magen tat weh. 胃が痛い。
 22) Der Arzt operierte den Magen. 医者は胃の手術をした。
 23) Er hat in die Augen gesehen. 彼は目を見つめた。¹⁵⁾

ここで特に注意すべきことは、②において所有の3格は任意的付加語と一致するということである。任意的付加語と見なす理由として、④のように省略しても文の意味は成り立つ。所有の3格の定義について、私見では、付加語という位置付けが最も適当であると思える。というのも、①を使って取り除き操作をすれば、次の事が判明する。所有の3格がかかる名詞を省いて、3格だけを残すと不完全なドイツ語になってしまう。[*Er hat seinem Freund gesehen.]

任意的補足成分(本当の3格目的語)は、文脈によって削除される。例えば、例文5)を引き合いに出すとすれば、3格目的語 dem Kranken は省略可能である。3格の dem Kranken が前の文脈で示してあるならば、省いたとしても誰に薬を持って来るのかが聞き手には伝わるからである。しかし、任意の3格は文脈には関係ない。④のように省略された文を使っても誰もが理解する。それゆえに、任意の3格はもともと身体や衣類に組み込まれている分肢構成部と見なす。

3.2. 「利害の3格」 *Dativus des Interesses (Dativus commodi – Dativus incommodi)*

利害の3格の統語的機能については、様態を表す添加語(副詞的規定語)の種類に属するという見方が一般的である。利害の3格は常に、文中のある人間にとっての損得につながる。また、„für-“ や „gegen-“ などの前置詞句に置き換えが可能である。

例文24) のように書き換えテストを行うとすれば、利害の3格は動詞に関わりがある凝縮された命題だということが分かる。¹⁶⁾

- 24) Er wäscht seinem Vater das Auto.
 彼は父親のために車を洗う。
 → Er wäscht für den Vater das Auto.
 彼は父親のために車を洗う。
 → Er wäscht das Auto. Das Waschen ist (geschieht) für den Vater.
 彼は車を洗う。それは父親のためにしたことだ。¹⁷⁾

利害の3格は、名前のとおり、二つの対立する意味を含む。まず、文中で行われる行為によって、誰が得をするのか、もしくは誰のためにその行為が行われるのかを伝える3格

がある。「利益の3格」Dativus commodi: 「Er trägt der Frau den Koffer. → Er trägt für die Frau den Koffer. 彼はその女性のためにトランクを運ぶ。」



また、都合の悪い事件を阻止することが出来ない、または望ましくない行為を行ってしまった事を指し示すこともある。「不利益の3格」Dativus incommodi: 「Das Papier fliegt mir weg. → Das Papier fliegt weg. Das geschieht zu meinem Nachteil. その紙は私のもとから飛んで行ってしまった。」しかし、不利益の3格は、同時に所有の意味をも有する。「私の紙が飛んで行ってしまった。」という解釈を行うこともできる。この場合、動詞の意味的結合価に頼ることはできないので、語用論の問題として扱われる。文脈を見ても見ないと言えないものもあるので、一文だけ見た時は分からないのである。

これに関して Helbig / Buscha¹⁸⁾ の意見によると、時おり二つの意味を同時に持つ利害の3格がある。

25) Er wäscht *dem Freund* das Auto.

解釈①彼は友達のために自動車を洗う。

→ 3格の書き換えテスト: *im Auftrage, im Interesse des Freundes* 友達の委託を受けて、友達のために (友達が持ち主だとは限らない)

解釈②彼は友達の車を洗う。

→ 3格の書き換えテスト: *das Auto des Freundes* 友達の自動車 (友達が自動車の持ち主である)¹⁹⁾

しかし、解釈②にある所有の3格の用法は、一般的に身体の部分と個々の衣類だけに使われるのが慣例である。

動詞 *waschen* についてよく考えてみると、「洗う」という行為自体に「人のために」という意味合いはもともと含まれておらず、動詞に依存している要素だとは思えない。そして任意の3格は、動詞 *waschen* が支配する他の補足成分 (主語 *er*、4格目的語 *das Auto*) によって意味論上、規定されているというわけでもない。

ある動詞に3格と4格が同時に付随している際に、3格を除去して4格を保つことはできるが、その反対のケースはほぼ起こらない。²⁰⁾ 次の例文では、動詞 *nähen* が使われているが、本来ならばこの動詞は4格目的語を支配すると考えられている。

26) Die Schneiderin näht *der Mutter* ein Kleid.

その仕立屋は母親のためにドレスを一枚縫う。

→ Die Schneiderin näht ein Kleid. その仕立屋はドレスを一枚縫う。

→ *Die Schneiderin näht der Mutter. その仕立屋は母親のために縫う。

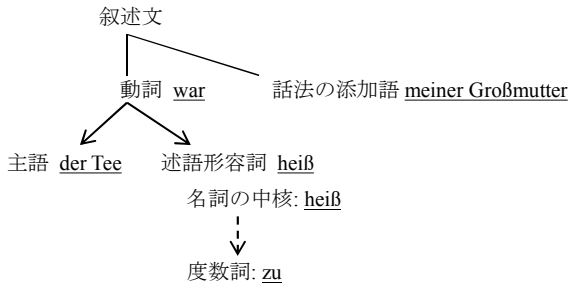
時おり、sein 動詞を使う叙述でも、任意の3格が現れる。しかし、これも動詞の意味役割の制限になんら関係がない。「Dieses Problem ist *meinem Freund* wichtig. = Dieses Problem ist *für meinen Freund* wichtig. この問題は私の友達にとって重要です。」詰まるところ、利害の意味にしろ、所有の意味にしろ、文脈によって判断せざるをえないのである。結論として、利害の3格は話し手が自在に、„für –“ や „gegen –“ の変形として文に付け加えることができる添加語と見なせる。

3.3. 「知覚の3格」 Dativus judicantis

「知覚の3格」は、まず依存関係構造樹において語法の添加語として、構文の枠外に配置される。文中の人物（主語）が何がしかについて判定、意見、評価を伝達する事を指すのである。ドイツ語では、別名「判断者の3格」Dativ des Beurteilers とも呼ばれている。書き換えテストを行うとすれば、次のような文が出来上がる。「Der Tee war meiner Großmutter zu heiß. → Ihrer Meinung nach war der Tee zu heiß. そのお茶は私の祖母には熱すぎた。」この例文の中では、「お茶が熱い」という事実について、意見を述べる人物が3格目的語 *meiner Großmutter* によって指示されている。

知覚の3格は形容詞に依存するという意見もある。²¹⁾ 構文上の規則として、形容詞の前に zu や allzu が用いられ、また genug が後置されることがあり、これらの副詞が形容詞と連結して一緒に使われるのである。知覚の3格は、常にある形容詞と共に現れるので、形容詞に依存しているというわけである。

しかし、知覚の3格は形容詞ではなく、文全体または主語を修飾するという理解が適当ではないか。なぜならば、意味的結合価の点では「お茶が熱い」という叙述は飲む人すべてに当てはまるわけではなく、お茶の味や温度を感じる場合、個人差が生じるからである。認識上、判断を下す主体の心理が対象物の性質に作用する。ゆえに本論では、知覚の3格を「語法の添加語」Modalitätsangabe と見なす。



3.4. 「関心の3格」 *Dativus ethicus*

次に、「関心の3格」についてであるが、1・2人称の形態で文中に現れる。話し手の関心を示すか、もしくは聞き手の関心を引くという役割を担う。つまり、単に感情的に、ある動作や行為に関心を示している人間を指す。²²⁾ 命令文または叙述文で、次のように使われる。

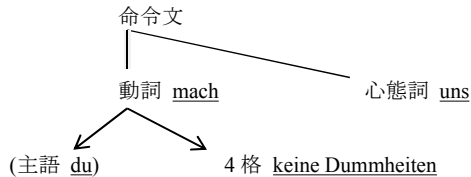
27) Mach uns keine Dummheiten! ばかなことをするんじゃない。

28) Das war dir vielleicht ein Blödsinn. まったくばかばかしかったよ。

29) Du bist mir ein Schlingel. お前はしょうのないやつだなあ。²³⁾

このように動詞の直後にしばしば見られ、個人的な関心、興味、態度表明（意見）などを含む。

上に述べた内容から推測すれば、人間の心情に関係があり、文全体を修飾している。下の依存関係構造樹では、動作主である *du* が主語となっている。



話し手の心情である *uns* は、主語 *du*・動詞 *machen*・4格目的語 *keine Dummheiten* のいずれかを受けるわけではない。それゆえに話法の添加語 (*Hoffentlich machst du keine Dummheiten.*) と似たような働きを持つ。関心の3格は、話し手の主観的心情を反映する心態詞、主に会話に使われる不変化詞の機能に近い。

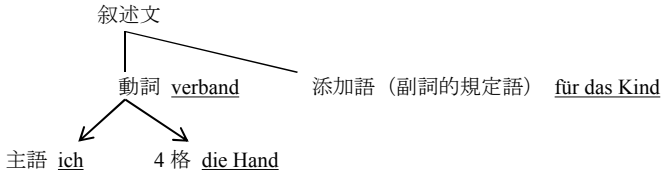
Helbig / Buscha²⁴⁾ の説では、この関心の3格は、任意的補足成分(補助添加語)の範疇に入ると考えられていて、感嘆表現でもまた使われる。不信の念を起す時や、催促、疑問の表現の場合に出てくる。しかし、伝達の方法に関与する問題であり、話し手が状況に関係なく自由に付け加えることができるので、ここでは動詞の支配下にはない添加語と見なす。

3.5. 「共感の3格」 *Dativus sympatheticus*

最後に共感の3格であるが、ある人物にとって有利な結果になるように、ある行為を行うという意味である。もう一つのドイツ語表記で *sympathetischer Dativ* と書くが、*sympathetisch* には「同情的な」という意味がある。動作主がある人物に対して共感しているのである。これは、人にとってある利益をもたらすゆえに、利益の3格 (*Dativus commodi*) と意味が類似しているように思える。「Er spült seiner Mutter die Teller. → Er spült die Teller. Das macht er für seine Mutter. 彼は母親のために食器を洗う。」

また、次の例文では所有の3格に近いという見方もある。²⁵⁾ 「Ich verband dem Kind die Hand.

私は子供の手に包帯を巻いてあげた。」書き換えテストでは常に „für –“ を用いる方が、行為の対象にとって良い事が起こるという意味合いが強くなる。「Ich verband dem Kind die Hand. → Ich verband für das Kind die Hand.」



ただ単に「子供の手に包帯を巻く」と、「子供の手に（見かねて）包帯を巻いてあげる」では、明らかにニュアンスの違いがあると思われる。従って、共感の3格は動詞や他の補足成分に依存せず、話し手が随意に付け加える添加語と見なす。

4. おわりに

仮に「Ich esse ihr. 私は彼女のために食べる。」という文を作るとしよう。まず、動詞 *essen* は、人間（具象名詞）と共に使われるので、動詞と主語の組み合わせには問題がない。しかし任意の3格 *ihr* に関しては、この場合は意味論上、つじつまが合わないので解釈することが困難になる。私たちは瞬時にしてこの文が意味を成さないことを察知する。要するに私たちの「世界知識」*Weltwissen* とかみ合っていないのである。その他にも、この文が一体どのような状況で使われるのかは、分からない。すなわち、文法規則に違反しているのである。意味論上の規則はまぎれもなく文法規則の一部と見なされる。²⁶⁾ 描写が矛盾していたり、解釈不可能の内容は、意味論上の規則によって絶対に阻止されなければならない表現である。人間の認識の内にある言語は、世界知識と部分的に関与している。「私は彼女のために食べる。」という文を私達は、世界知識を使って意味が成り立たない文だと解釈するのである。私たちの頭の中では、「私は彼女のために食べる」という文と、私たちの世界で起こる事実が比べられる。それによって、文の意味と世界知識が相容れないことが突きとめられるのである。そしてこれは無論、文法規則において通用する解釈ではないのである。それゆえに、任意の3格と決まった動詞との結びつきについて解釈をする場合、意味論を使用しないわけにはいかないのである。そして、書き換えテストにおいても、いろいろな命題を作って、考察を重ねることが重要である。

注

- 1) Welke, Klaus: Valenztheorie und Konstruktionsgrammatik. In *Zeitschrift für Germanistische Linguistik*. 37. 2009, S. 81–124, S. 85f.
- 2) Gallmann, Peter: Der Satz. In: Wermke, Matthias / Kunkel-Razum, Kathrin /

- Scholze-Stubenrecht, Werner (Hg.): Duden. Die Grammatik. 8. Aufl. Band 4. Mannheim / Zürich 2009, S. 819.
- 3) 川島 淳『ドイツ言語学辞典』、紀伊国屋書店、1994年、1078頁。
 - 4) Gallmann (2009), S. 819.
 - 5) Gallmann (2009), S. 775f.
 - 6) Helbig, Gerhard / Schenkel, Wolfgang: Wörterbuch Zur Valenz Und Distribution Deutscher Verben. 7. Aufl. Leipzig 1983, S. 42f.
 - 7) Ebd., S. 28f.
 - 8) Ebd., S. 42.
 - 9) Helbig, Gerhard / Buscha, Joachim: Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Leipzig 1980, S. 260.
 - 10) Ebd., S. 42.
 - 11) Ebd.
 - 12) Gallmann (2009), S. 818.
 - 13) Ebd.
 - 14) Helbig / Buscha (1980), S. 496ff.
 - 15) Ebd.
 - 16) Helbig / Schenkel (1983), S. 42.
 - 17) Ebd.
 - 18) Helbig / Buscha (1980), S. 498.
 - 19) Ebd.
 - 20) Ebd., S. 256.
 - 21) Gallmann (2009), S. 818.
 - 22) Sitta, Horst: Der Satz. In: Klosa, Annette / Scholze-Stubenrecht, Werner / Wermke, Matthias (Hg.): Duden. Grammatik der deutschen Gegenwartsprache 6. Aufl. Band 4. Mannheim / Leipzig / Wien / Zürich 1998, S. 658.
 - 23) Gallmann (2009), S. 264.
 - 24) Helbig / Buscha (1980), S. 260.
 - 25) 国松孝二(編)『独和大辞典』第2版、小学館、1998年、489頁。
 - 26) Linke, Angelika / Nussbaumer, Markus / Portmann, Paul R.: Studienbuch Linguistik. 5. Aufl. Tübingen. 2004, S. 113f.

Handelt es sich bei freiem Dativ um eine Ergänzung oder um eine Angabe?

Satomi BABASAKI

Außer der Dativergänzung stelle ich alle freien Dative zur Diskussion. Dabei wird der Dativus des Interesses, der Pertinenzdativ, der Dativus ethicus, der Dativus judicantis und der Dativus sympatheticus behandelt. Besonders unterstreiche ich bei der Analyse, worauf freie Dative sich beziehen, d. h. entweder auf das Objekt oder auf das Subjekt im Satz. Und dann vergleiche ich den Dativus commodi mit dem Dativus sympatheticus, um herauszufinden, ob zwischen ihnen semantische Unterschiede oder eher semantisch-funktionelle Gemeinsamkeiten bestehen. Der Dativus ethicus kommt in der Alltagssprache nicht oft vor, und dieser freie Dativ ist, meiner Meinung nach, in der Bedeutung vielmehr den Modalpartikeln ähnlich. Der Dativus judicantis funktioniert als eine Art der Modalitätsangabe, darum möchte ich feststellen, wodurch er sich von der Modalitätsangabe unterscheidet. Hinzuzufügen ist, dass man beachten soll, wie die Bedeutungen des Verbs durch den Kontext geändert werden.

Der freie Dativ ist nach wie vor ein Problem, das nicht leicht zu lösen ist. Zum Beispiel enthält der folgende Satz ein Dativobjekt: „Er kocht ihr eine Speise.“ Es gibt zwei Möglichkeiten, dieses Objekt entweder als eine Ergänzung oder als eine Angabe zu interpretieren. (A) freier Dativ als eine Ergänzung : Eine andere Bedeutung des Verbs wird als Stichwort in das Wörterbuch gesetzt. (B) freier Dativ als eine Angabe : Ein freier Dativ wird nach der Situation (zur Modifizierung des Verbs) in den Satz gesetzt. Wenn man es von der semantischen Valenz des Verbs her betrachtet, ist zu bemerken, dass der freie Dativ sowohl eine Ergänzung, als auch eine Angabe werden kann.

Das Forschungsobjekt ist aus der Wochenzeitung „die Zeit“ entnommen. Es handelt sich um einige Beispielsätze, die tatsächlich in der Wirklichkeit als Gegenwartssprache verwendet werden. Das Ziel der Forschung ist, herauszufinden, wann und warum der freie Dativ zu einem obligatorischen Element wird. Nicht nur die semantische Valenz des Verbs, sondern auch wesentliche pragmatische Aspekte sollen untersucht werden. Ein wichtiges Motiv dabei ist, ob der freie Dativ manchmal vom Zusammenhang des Textes abhängig ist. Dativobjekte sind normalerweise Aktanten, die vom verbalen Kern gefordert werden, also Satzglieder. Doch einige Fälle, wie der Pertinenzdativ, können der Nominalvalenz zugeordnet werden. Sie erscheinen als Satzgliedteile. Der Pertinenzdativ wandelt sich zum Possessivpronomen oder zum Genitivobjekt, aber nicht immer. Ich ziele also auf eine überzeugende Lösung des folgenden Problems: Welche Fälle des Pertinenzdativs werden vom Nominalkern gefordert? Darüber hinaus möchte ich genau wissen, welche Arten von freien Dativen zur Nominalgruppe umgewandelt werden können.